

【レポート】

シンポジウム「自然史標本の保全を考える 日常から緊急時、復興まで」

東日本大震災の標本レスキューへの参加以来、災害時の自然史標本の保全と緊急時の備えは、南海地震での被害が想定される四国に立地する当館にとって向き合うべき課題となっています。今回のシンポジウムでは、他館・他地域での取り組みや国外の動向などの情報を得ることが出来て、非常に有益でした。

愛媛県では、自然史系博物館ではないものの自然史標本を保有する小規模館が少なくありません。自然史系標本に詳しいスタッフがいないことも多く、災害時の対応以前に、どのような資料があるかという把握から、日常的なメンテナンスまでアドバイスを求められます。いざというときにどのような連携体制が取れるかは、こうした日常のやりとりの中で培われる関係が重要で、それは単なる人的な繋がりだけではないと考えています。人的な信頼関係があり、そのうえで施設相互でのコレクションの把握、さらにはどこに何があるか、という具体的な部分まで知っておくことができれば、さらに有益に違いない。常日頃から考えていること、他館との間で徐々に行っている取り組みが、西日本全体の中で同じ方向に向かっていることに安心感を抱くとともに、地域内外での連携をさらに強化し、館種を越えた協力体制を構築する必要があると感じました。

自由討論の中では、こうしたレスキュー関連の情報のうち、英語で記されている情報を翻訳することが提案されていました。国際会議の内容だけでなく、こうした西日本自然史系博物館ネットワークでの議論の経過なども含め、西日本以外の地域や館種の異なる学芸員でも情報が共有できることは良い取り組みだと思います。また、レスキュー活動に関して西日本自然史系博物館ネットワークがより大きな枠組みの中においても役割を求められつつあることが話題となりました。活動が活発になることで社会的な認知が高まり、その活動の幅や地域が拡大することはある意味では必然的な流れかもしれません。

いつも思うのですが、西日本自然史系博物館ネットワークで交わされる議論は実践的で、現場の学芸員が本当に必要としている情報が多いと思います。今後も活発な議論、実践的なワークショップなどが開催されることに期待しています。